



第41回全国中学生人権作文コンテスト

令和4年度鎌倉市審査会

# 中学生人権作文集

鎌倉市人権擁護委員会



# 目次

人権作文集の発行にあたって

鎌倉市人権擁護委員

加藤 三恵子

..... 1

鎌倉市長賞

バス停で会う人

横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校

一年 中島 連 ..... 2

身近な人権侵害

鎌倉市立大船中学校

三年 村尾 果恋 ..... 4

身近な人権

鎌倉市立第一中学校

三年 小野 絢華 ..... 6

いじめから命を守るための勇気

横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校

一年 鈴木 諒 ..... 8

私の自慢の友達Aの話

鎌倉市立岩瀬中学校

三年 山田 紅亜 ..... 10

鎌倉市教育委員会賞

過去は未来の原動力

横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校

一年 吉越 千織 ..... 12

考動し、変える未来

横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校

一年 栗原 麻衣音 ..... 14

鎌倉市人権擁護委員会会長賞

堂々と

横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校

一年 鷺谷 漱介

.....

16

稲妻の少年の願い

鎌倉市立岩瀬中学校

三年 小林 龍平

.....

18

小さな社会

鎌倉市立第一中学校

三年 相川 三穂子

.....

20

鎌倉市人権擁護委員会奨励賞一覧

.....

22

第41回全国中学生人権作文コンテスト鎌倉市審査会入賞者表彰式

.....

23

人権擁護委員とは

.....

24

第四十一回全国中学生人権作文コンテスト鎌倉市審査会  
人権作文集の発行にあたって

鎌倉市人権擁護委員 加藤 三恵子

【全学年からの応募を、期待いたします】

全国中学生人権作文コンテストは、法務省と全国人権擁護委員連合会で、人権尊重思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として、昭和五十六年（一九八一年）から実施しており、今年で四十一回目を迎えました。

中学生の皆さんが一生懸命に書いてくださった作文を審査し評価をするということへの緊張感と期待感でいっぱいでした。

本年度は、鎌倉市内の市立・国立中学校六校から一八三編の作文が寄せられました。残念なのは、例年より応募総数が少なかったことでしたが、反面、一年生からの応募が目立ったことを喜ばしく感じています。

内容は、「障がいのある人のこと」「いじめ」「差別」「高齢者」「ハラスメント」「ヤングケアラー」「LGBT」「家族の支え」「平和について」等々をテーマにした作文で、いずれの作文も中学生らしい感性に富み、心を打たれるものがあります。

コロナ禍も三年目になり、withコロナの段階となり、さらに繋がりがや絆が見直される時でもあります。このような時代に次世代を担う中学生が、人権に真摯に向き合い作文に応募してください

ています。

今後とも、全学年生からの応募を心から期待するとともに、引き続き人を思いやる気持ちを大切にして過ごしてくださることを願っております。

最後に、応募いただきました中学生の皆さん、ご協力下さいました学校及び先生方、ご家庭の皆様から感謝を申し上げます。

## 鎌倉市長賞

神奈川県大会優秀賞・湘南地区大会優秀賞

バス停で会う人

横浜国立大学教育学部

附属鎌倉中学校 一年

中島 連

小学一年生の時から、朝のバス停でいつも会う男の人がいます。

その人は目が不自由で、白い杖を持っています。朝はバス停まで必ず、男の人のお母さんが付き添っていて、バスに乗るところまでは見届けてくれます。男の人はいつも優先席に座り、鎌倉駅に着くと降りていきます。バスは鎌倉駅のロータリーのどこに着くのかはその時の様子によって違うので、改札の目の前で降りられないときもあります。いちばん改札から離れたところで降ろされてしまうと、そこからロータリーを横切らないといけなくて、車もどんどん入ってくるので、目が不自由だととても危ないです。

男の人は、いつも顔をちよつと傾け、耳を澄ませて車の音を聞いて渡れるかどうかを判断します。でも、たいがい一人だけで渡る事はなく、バスから降りた人たちが声をかけて一緒にロータリーを歩いていきます。朝は乗るバスも決まっているの

で、顔を覚えている人も多く、目の不自由な男の人がバスに乗ってくることを皆わかっているのです。

夕方。鎌倉駅のバス停で家に帰るところの男の人に会うこともあります。駅からバスに乗るときは長い列ができます。バスが到着しても、男の人は列がどのくらい長さなのかはわからないので、一番最後に乗るために、顔を傾けて列の人たちの足音が消えるのを待っています。でもその時も、列の中から誰かが男の人の肩をぽんとたたき、バスの昇降口まで連れていきます。男の人はいつも、

「すみません、ありがとうございます」

と笑顔でお礼を言ってバスに乗ります。列の後ろにいる人も、男の人が先に乗ってしまったても文句は言いません。

まったく知らないひと同士なのに、そこにいる誰かがいつも男の人を助けています。これはとてもすてきなことだなと思いました。

でも、小学4年生の頃のことです。お母さんとバスに乗った時に男の人も乗っていて、「連ちゃんも声をかけて一緒にロータリーを渡ったら」と言われてはっとしました。今までは男の人の様子を離れて見ているだけで、私が声をかけたことは一度もなかったのです。それまで、目の不自由な人を助けるのは大人がやることだとなんとなく思っていました。お母さんに言われたときに、「それはできない」と答えました。なぜかわからないですが、どうしてもそれはできないと感じました。

ずっと前から顔は知っていても話をしたこともない人で、一緒にロータリーを渡るのには恥ずかしいし、勇気がでませんでした。男の人は助けてくれた人にいつも優しくお礼を言うのに、話しかけるのが怖いと思いました。その時は別の人が声をかけてロータリーを渡っていきました。その後もバスで会っても、私から声はかけられませんでした。何もしませんでした。

そして5年生、6年生の頃はコロナの流行のせいで、登校時間が遅くなり、男の人と同じバスには乗らなくなりました。

中学1年になった時、バス停で久しぶりに男の人に会いました。男の人のお母さんが気が付いて、

「あらあ、もう中学生？大きくなったわねえ」と話しかけてくれました。私が制服を着ていたのでびっくりしていました。男の人のお母さんは、前より痩せて髪の毛も白くなっていると感じました。そしてもしかしたら、病気になって男の人をバス停まで送れない日もあったのかなあとちよつと心配になりました。

た。

ずっとこのままお母さんが元気だったらいいのですが、いつかは男の人が一人でバス停に来る日が訪れると思うと、私の気持ちは急にさわさわとしました。

もしそうだったら、周りももっと助けないといけないと思いました。その時は決心しました。前はどうしてもできなかったけど、中学生の今ならできるかもしれない。もしこれから先、バス停に男の人が一人だけで立っているのを見たら、今度は私が声をかけてみよう。そして肩に手を置いて一緒にバスに乗ろう。

## 鎌倉市長賞

### 湘南地区大会奨励賞

#### 身近な人権侵害

鎌倉市立大船中学校 三年

村尾 果恋

私は日頃から母に頼み事をされることが多い。雨の日ならば洗濯物を外に出しておいて、日が暮れてきたらカーテン閉めて、ゴミの日ならばゴミ出しといて、とか私にばかり何もかも頼んでいて兄には何も頼まなかった。小さい頃の私は、お母さんは私の事ばかり頼りにしてくれている、私は頼れる人なんだ、と自分への誇りを感じていたため、何か頼み事をされる度快く受け入れ、素早く頼まれた事をこなしていた。また、こなした後母からのありがとうの一言が最高に嬉しかった。だが、受験生といわれる中学三年生になり、学校、塾、高校説明会、部活の大会など、私が生きてきた中で一番忙しいと言える時期が到来してしまつた故、母の頼み事が私にとって大きなストレスになつてしまった。

昨日、兄は兄の部屋のベットでゴロゴロと寝転がりながらスマホをいじっているなか、私は自分の部屋で今日数学の課題を終わらせるぞ、と思ひ必死に勉強している時に、母は私の元へ来た。「洗濯物取り込んで。」ついに私は堪忍袋の緒が切れた。

「なんで私がやらなきゃいけないの。お兄ちゃんはある暇そうにしてて私はこんなに一生懸命勉強してるのに私に頼んでくるわけ。」母が言い返す。「あなたは女の子だから。女の子だから家の事はできるようにならなきゃいけないの。私だってあなたくらい歳の時ちゃんとこれくらいしてたよ。弟は何もしなかつたけど。」と。私は「そんなの男女差別じゃん。」と言ひ、ドスドスと足音を鳴らして部屋に戻つた。

「女の子なんだから。」「男の子なんだから。」これらの言葉は考え方が古いと思う。女だから家事をできるようにしなければならぬ、というきまり、義務はないはずなのに女性は家事をして、男性は仕事に行く、などの印象が今でも残っているのは何故だろうか。昔の文化の名残なのだろうか。確かに私は女の子として生まれてきたが、忙しいときくらい家事の手伝いはしたくない。兄は暇なのに「男の子だから」何もしなくていい。これは男女差別であり、人権侵害であると思つた。私だって暇な時ならば家事を手伝うことはできるけれど、忙しい時くらい



自分のやるべき事をやらせて欲しいのに、やらせてもらえない。男女という差があることによって自由が妨げられ、制限されてしまっている。今はSDGsの十七の目標のひとつに「ジェンダー平等を実現しよう」というものがある。このように世界的にも男女の差を無くし、平等にするための努力をしていることは伝わるが、実現しきれていないのが現状である。まさに母が「女の子だから」と押し付けてきたことは、身近な男女差別であると思う。

母のこの発言以外にも、ジェンダー平等が行き届いていない部分が生徒にある。先日、私の学校では体育祭が開催され、リレーが行われた。そのリレーでクラスメイトの男の子が女の子に抜かされてしまい「女子にも負けるとか。」と嘲笑われていた。まずここでおかしいと思ったのは「女子にも」という発言だ。身体能力は男性と女性を比べると女性の方が劣っている部分はあるが、そこで女子に負けないのがあたり前、といった考え方を持っているのはどうなのかと思う。また、いくら男性の方が身体能力が優れてるとはいえ、個人個人で得意不得意はあるため男性、女性の性別による印象で心のない発言をするべきではないと思う。

さらに、このような発言は男女差別の問題だけでなく、いじめに繋がるリスクもあるのだ。リレーで抜かされた男の子は心無い発言に対して特に何も思っていないように見えたが、人によつては嘲笑われたり、ばかにしたような発言をされたりする

ことは精神的なダメージが大きいと思う。そのダメージに付け込み、その子の他のコンプレックスをばかにしたりすることで自分のストレス発散をする人がいるかもしれない。これがエスカレートしていけば歴史としたいじめとなる。

このようにニュースや新聞だけでなく、身近にも男女差別やいじめのリスクが潜んでいることを改めて実感した。私は母からの軽い男女差別的な考えでさえ傷ついたので、まずは母にそのような考えを止めてもらうため、この人権の作文を通して説得しようと思った。些細なことでも男女差別、いじめによつて人権を侵害されることが多々あると思う。だからこそ、身近な男女差別、いじめの原因を少しでも減らせるよう、知識を蓄えるなど、自分なりの努力をしていきたい。

## 鎌倉市長賞

### 湘南地区大会奨励賞

#### 身近な人権

鎌倉市立第一中学校 三年

小野 絢華

私には、ずっと心に引っかかっていたことがあります。

三月に鎌倉駅前の無印良品の一角にカラフルな展示がしてあり、なんの予備知識もないままふらりと立ち寄ったのは「いろんなカタチ展」でした。発達の多様性について理解を深めてもらおうと、四人のお母さんたちで結成された市民団体のイベントでした。学校で配られた「いろんなカタチ新聞」がとびだしてきた展示は驚くことが多く、端から端まで見学して、もう一周確認したくなるものでした。

あなたはナニイロという診断では五色のカラーに分けるだけなのに、家族でも診断結果が異なり、少なからず衝撃をうけました。私は「他人の気持ちに敏感で、優しくて穏やか。予測がつかないことは不安になるタイプ。」母は「他人の欠点を指摘しがち、正義感が強い。」これが個性であり、その人だけのオリジナルのものだそうです。その個性が強すぎて、本人や周りの人が困っていたら、助けてあげる方法を考えてほしいという内容でした。自分自身や相手がどんな特徴なのかを知り、そ

の特徴が理由で周囲とうまくいかなかったり、困っている人がいることを知りました。

その人は幸せなのでしょいか。

発達障害や自閉症などにより、発達に特徴のある子どもたちが自分自身を再確認し、周囲の人にも理解する能力を養ってもらうことを目的としたイベントでした。

人としての見た目は何も変わらないのに、文章が読めない、じつとしていられない、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚等の感覚が敏感だったり、文字の見え方が違っていたり、自分の感覚では理解できない世界を持っている人がいることを知りました。同じ学校やクラスで、身近な人に起こっているかもしれないと思うと心が揺さぶられました。見ているようで見ているふりだったので。私なりの価値観で他者の行動を評価してしましました。自分の正義を当たり前とし、そこから外れている人は変わった人だと思っていました。その奥にある理由を分かろうとしないことは、他者を傷つけることになるのではないかと思

ました。わがまま、自分勝手だと思ったり、相手を怠けていると決めつけたり、反対に自分を責めたり、傷つけたりしている友人がいるのではないかと考えるようになりました。

今、ニューロダイバーシティ（神経多様性）という考え方があるそうです。障害は多様として考えようと、世界の様々な企業で広がりを見せているそうです。理解と環境、関係機関との連携を整えることが、多様な個性を認める社会につながるのだそうです。

六月に母がメニエール病になり、急にめまいがすると倒れて入院した時、一番近くにいる家族なのに母が抱えていた状態に気づくこともなく、退院してからも見た目はいつも通りなのに、不安定な状態の母に動揺してしまいました。見えているものだけでは、親でも察せないことがあるのです。他人なら、なおさらです。

母は、なかなか仕事に復帰ができませんでしたが、母の職場では「合理的配慮」をしてくれました。合理的配慮とは、障害がある人となない人が、平等に人権を享受し行使できるように、個々の特徴や状況に応じて発生する障害、または困難を取り除くための個別の調整や変更のことをいうそうです。このような相手を思いやることこそ、人権を守ることなのだと思わりました。

生きるうえでの喜びも、生活の中での傷つきも、それに対する周囲のフォローも一人一人違います。十五歳の自分自身のこ

とできえも、十分に理解できていないのに、他人を理解することはできないと思います。でも、だからこそ話を聞くこと、知ること、想像することが大切なのだと思えました。

今回、「人権」というテーマを考えた時に、命を大切にすることなのかと漠然と考えていましたが、人権とは自分を大切にすること、近くにいる人に寄りそってあげることなのではないかと思えました。他人を知ること、命がある限り続いていること、これが、私にできる人権を守ることなんだと感じました。

## 鎌倉市長賞

### 湘南地区大会奨励賞

いじめから命を守るための勇気

横浜国立大学教育学部

附属鎌倉中学校 一年

鈴木 諒

昨今テレビやネットニュース等ではいじめられ誰にも相談せず、自ら死を選んでしまう悲しい事件が多く報道されていますが、みなさんはもしいじめられたらどう対処しますか。私も過去にいじめられた経験があり、思い返すと人事には思えず怖くなります。

小学四年生の四月の中頃にある男の子が私に対していじめを始めました。周りの人に聞こえない様に「きもい」等の暴言や、わざとぶつかってくる事がありました。私は怖くて何も言えずにいると、「無視するとかやばい、最低だね」と更に暴言が続きました。私は耐え続けていましたが、三学期の始め頃に我慢の限界が訪れ、母や先生、友達に相談する事を決心しました。まず母に相談すると先生に伝えるための記録の作成を一緒に行ってくれました。それにより先生もとても心配を下さる私と母、先生、三人でどの様に解決するか話し合いを行ってくれました。先生は状況を把握し、相手に注意し続けてく

れました。また友達に相談をすると一人の時間が出来ない様、一緒に行動し、はげましの言葉をかけてくれとても心強かったです。私の経験を元にいじめへの対処法をいじめで苦しんでいる人に伝えたいと思いました。

私の考えたいじめの対処法は三つあります。一つめは周りの人に相談をすることです。親や先生等の大人には、具体的ないじめの内容を伝えることで、適切な助言や相手への注意を行ってくれます。また大人だけではなく、信頼できる友達に話すこともとても大切です。友達は、相手からの暴言がいかにも不適切であるか教えてくれたり、はげましの言葉で勇気を与えてくれたりするのであります。

二つめはいじめを記録することです。これは私が母から実際に教わったことで、先生等の大人にいじめの具体的な内容を伝えるときにとっても役に立ちました。いつ、どこで、だれが、何をした等、時系列にそってより具体的に書くことが大切です。

三つめは堂々と行動することです。私は小学生低学年の頃は好きなことや得意なことを知られる事が恥ずかしく隠して生活していました。しかしそういったことを恥ずかしながら、堂々とする事で周りから認めてもらえることも増え、いつの間にかいじめも減っていました。私はそういった経験から生活の仕方によっていじめられやすさが変わる事を学びました。堂々と行動することでいじめられるすきを減らせるのだと思います。

この三つが、私がより有効だと考えるいじめへの対処法です。次にいじめを受けて苦しんでいる人にかけてあげると良いと感じる言葉を私自身の体験から二種類書いていきます。一つめは、いじめの内容である暴言や暴力を受けることはおかしな事であると伝えることです。「きもい」などの言葉に傷ついていたら「あなたはきもくなんかない！」といじめの相手の言葉をはつきり否定することでとても心強く感じます。

二つめはその人の元々の良いところをほめることです。そうすることで自信を取り戻し堂々と行動できることにつながります。いじめを受けていると、とても心細く自信も失いがちですが、こういった言葉で味方がいることを伝えることで自信や勇気がわいてくると思います。

いじめを受けていることを人に報告したりいじめを受けている人に寄りそうことはとても勇気のいることですが、それは自分自身や大切な友達の命を救うことにつながります。

もしいじめを受けてしまったら、一歩踏み出す勇気を持って、周りの人に相談することこそ、いじめに対する最大の抵抗だと私は思います。

## 鎌倉市長賞

### 湘南地区大会奨励賞

#### 私の自慢の友達Aの話

鎌倉市立岩瀬中学校 三年

山田 紅亜

「なんで自分の事を俺って呼んじゃだめなの？女の子は私、うちで呼ばないとだめなの？それって誰かが決めた事なの？」  
私はこの言葉をきっかけに私の性についての捉え方や考え方がガラリと変わった。

Aと出会ったのが小学校一年生の頃。お互い話しも合い、すぐに仲良くなる事が出来た。ある日Aはあるときかみの毛をバツサリ切って全身黒で学校に登校してきた。四年生の頃だった。教室に入った時、クラスの注目の的になった。

「Aちゃんなんで男の子みたいなの？」

「なんで真っ黒なの？」

「なんかお前女のくせに男みたいダッサ」

など、クラスの人達からAの容姿に対する言葉が飛び交った。Aはその時ずっと下を向いたまま、黙っていた。その日の昼休みAに呼ばれて二人で話をした。

「なんで女の子は男の子みたいにしちゃいけないんだろう。前から私っていう呼び方に違和感を感じてて、やっぱりおかしい

のかな」と涙ながらに訴えてきてくれた。私はこの言葉の返信に四年生ながらこう答えた。

「Aはずっと悩んでたんだね。気づいてあげられなくてごめん。どんな姿になったAも好きだから、ありのままの自分を貫いて！」と四年生ながら頑張って言葉にして返信をすることが出来た。その後私達二人は性について図書館で本を探して性同一性障害やトランスジェンダーについて初めて知った。Aは、「初めて自分はおかしくないんだなという事がわかったよ。これを機に私から俺に呼び方を変えてみようかな！」と、初めてAのこんな笑顔を見る事が出来た。その後も二人で性について沢山話し合った。

ある日、Aが友達と喋っている時、

「最近〇〇流行ってるけどどう？」

「ありがとう！Aちゃんももらいなよ！」

「あ、俺はいいや。ありがとう。」

「え、Aちゃんは女の子なのに俺なの？なんで？女の子は名前

か私かうちで呼ぶんだよ」

Aはこう答えた。

「なんで自分の事を俺って呼んじゃだめなの？女の子は私、うちで呼ばないとだめなの？それって誰かが決めた事なの？」

この言葉をきっかけにクラスのAへの容姿に対する言葉はなくなり、逆にクラスの皆で性について考えたり、皆でAについての話し合いなどをしたりしながら、長い月日が流れ小学校の卒業式になった。卒業式が終わり、Aに呼ばれて二人で話をした。

「本当、話を聞いてくれてありがとう。おかげで、本当になりたい自分を見つけれられた。これからこんな俺と仲良くしてね！」

Aとは今別々の学校に通っています。たまに会う時私は、  
「今日もAはカッコイイね！」

私の自慢Aの話が終わります。



## 鎌倉市教育委員会賞

過去は未来の原動力

横浜国立大学教育学部

附属鎌倉中学校 一年

吉越 千織

これはまだ、私が「人権」という言葉を知らなかった頃の経験だ。同じクラスの男の子が、公園の自動販売機の前でウロウロしていた。違和感があつて声をかけると、その手には千円札が握られていた。

「お母さんの財布から盗んだんだ。」  
その言葉にどれほどの衝撃を受けたことか。何故盗むまでしてお金が欲しいのか分からなかった。今考えると、その子は親に十分な保護をしてもえなかったのではないかと思う。

私の両親は共働きで、毎日忙しそうだ。でも私は両親に愛され、守られていると思う。しかしその子はどうか。

「朝ご飯食べてないんだ。」

と言いながら毎日給食を何度もお代わりし、

「帰りにコンビニ寄ろうと思って。」

と靴の中に隠した五百円玉を見せてきたこともあった。そのうち万引きでもするようになったらどうしよう、と私は心配でたまらなかつた。止めた方がいいのかな、と迷うこともあった。

けれども、その子が一生懸命生きていることがひしひしと伝わってくるので、何も言えなかつた。

大人だけでなく、子供にも人権はある。本来なら、大人からしっかり守られる立場であるべきだ。弱い立場にいる子供に親が愛を注ぐことは、当たり前のことだ。しかしこの世には「虐待」が存在する。この言葉の過去を振り返ると、悲しい気持ちになると思う。だからといって、目をそらし続けてはいかないと気づいたので、ここにつづりたい。

「児童虐待」と向き合うにあたって、まず大人に考えてほしいことがある。目の前の子供を子供として見ているだろうか。自分よりも経験が少なく、心が傷つきやすい年下の人間。高い場所から見下すのではなく、人生の先導者となり、正しい道や方法で導いてあげようと行動出来ているか。

子供のしつけに暴力を使うことの良否が一昨年、沢山のメディアで取り上げられていた。女の子が父親からの暴力で命を落としてしまったという過去を振り返った出来事だ。この問題に



ついて考えてみた人も多いのではないか。特に、どんな事が体罰になるのか、その線引きには頭を悩ませられたことと思う。そしてついに二〇二〇年四月、体罰を禁止する法律が施行された。「改正児童虐待防止法」と「改正児童福祉法」だ。このように、過去を見つめて、未来を考えることは、よりよい社会を創造する第一歩だ。

では、虐待を無くすために、私達ができることは何だろうか。子育てをする親は、予想以上に体の負担や心の負担があるのだと思う。たまってゆく疲労が、人から冷静さを奪ってしまいかもしれない。そうなる前に、虐待防止の相談窓口や、信頼できる人に悩みを打ち明けることが大切だ。だが実際、相談が出来なくて起こっているのが虐待だ。信頼できる人がいるかどうか、誰かが気づいて助けてくれるかどうか、命がかかっている。

私は、普段から挨拶をして、地域の人と積極的に関わることで、虐待を無くすために必要だと考える。そうすることで信頼関係が築けるだけでなく、違和感に気づいて声をかけることができるからだ。

「児童虐待」と聞くと、目を背けたくなるニュースが多い。「かわいそう」と思うだけで、自分は大丈夫だからと他人事に捉えてしまいがちだ。しかし、それで人権が守られるだろうか。私は、あの男の子の事を他人事だと思っていたのかもしれない。助けようとする気持ちが無かったから、言葉が出なかったのか

もしれない。だから、この後悔をこれからの自分に生かしてきたいと思う。

過去の悲劇を忘れず、前へ進もう。過去は未来の原動力だから。

## 鎌倉市教育委員会賞

孝動し、変える未来

横浜国立大学教育学部

附属鎌倉中学校 一年

栗原 麻衣音

今、この時も世界では罪のない子どもたちが命を失っている。二〇二二年二月に始まったウクライナへの軍事侵攻だけでなく、武力による紛争や内戦は、第二次世界大戦後七十七年経った現在も無くなってはいない。それどころか紛争地域は少なくないのだ。民族や宗教・文化の違い、経済問題からも対立は起こるが、武力行使を伴うと紛争となり、多くの場合、罪のない子どもたちが犠牲になってしまう。

ウクライナでも学校が爆撃されて、校舎は全壊し約六十人の子どもが亡くなったと報道された。クラス二つ分の子どもの命がいとも簡単に奪われたのだ。そのニュースを聞いて私は心を痛めた。同じルーツを持つ国と位置づけるウクライナに対して、プーチン政権は影響力を及ぼす目的のために干渉し、軍を派遣した。ロシアはNATO（北大西洋条約機構）の東方拡大に強い抵抗感があり、東欧諸国がNATOに加盟することや東欧諸国に軍事施設を設けることを嫌がったことだという。こう聞くと、独裁者のわがままで一方的に始めた軍事侵攻なの

に、すぐに止めさせられない国際連合は機能していないといえる。

ウクライナに限らず、対立の要因はさまざまなことが絡み合っただけで複雑になり、すぐに解決するのは難しいのかもしれない。しかし、このような環境下に置かれた子どもたちは、紛争の影響で十分な教育が受けられなかったり、暴力にさらされたり、少年兵にさせられてしまうこともある。毎日の食事さえもままならないだろう。解決を急がなければならない。

中東やアフリカでは、何年も何十年も解決せずに紛争状態が続き、数多くの人々が亡くなっている。ウクライナ問題が同じ道をたどらないために、私たちができることは何だろうか？直接的な募金やモノの寄付、ボランティア活動もあるだろうが、私は意識を変えてみるのが解決につながると思う。

日本は民主主義国家だ。民主主義は「人民が直接、あるいは代表を通じて権限を行使し、義務を遂行する統治形態」で、基本的な人権の尊重を柱としている。日本で暮らしていると、民主

主義を当たり前だと考えてしまうが、そんな日本も戦前は違っていた。太平洋戦争では子どもたちも空襲にそなえて防空演習をしたり、疎開やいろいろな団体訓練をしたり、落ち着いて勉強するどころではなく、個人の自由などなかったそうだ。日本は敗戦してGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）に民主主義を押し付けられたが、私たちはそのおかげで人権やさまざまな自由を手に入れたのだ。

しかし、今世界の民主主義国（地域）は少数派だという。バイデン米大統領が民主主義サミットを開催したのも、近年権威主義（専制主義）の国が力を増していることへの危機感からだ。権威主義は強権的な政治のもとで市民の権利を制限して統治するやり方で、ここには私たちが当たり前に持っている人権がない。

人権とは「すべての人々が生命と自由を確保し、それぞれの幸福を追求する権利」あるいは「人間が人間らしく生きる権利で、生まれながらに持つ権利」であり、本来誰にとっても身近で大切なものであるはずだ。

自分の思ったことを自由に口にしたり、自由に学ぶこと、自分の選んだ人と結婚すること。他にも好きな服を着ることや好きな音楽を聴くこと、病気になったら医療を受けること。これらはすべて、私たちが当たり前に持っている「人権」である。人権が保障されなかったら、その当たり前が無くなって、自分の身の安全さえも約束されない。このような状況下に非民主主

義国の人はずっといるのだ。ウクライナのように民主主義が脅かされて初めて、私は人権を意識した。

人権はすべての人が大切にされ、人間らしく幸せに生きるためのもの。であれば、今の世界には人権侵害を受けている人が多いのではないか。

日本など民主主義国家の中には、当たり前すぎて、民主主義の有り難さを意識していない人もいるだろう。みんなが過ごしている普通の日々も嫌だと思ってしまう。誰かにとっては贅沢で羨ましいことだということを忘れてはならない。世界には今、自分ができていることが当たり前ではない人がいることに思いを馳せてみよう。すると、意識に変化が起こる。一秒を大切にしたり苦手なモノも食べてみたり。知ることが、大事だ。世界に触れる機会を設けることも現状を変える一端になるかもしれない。一人の力では難しいことも、たくさんの方が協力すればできるのだ。勇気を出し声をあげたら、国を変えることもできるだろうし、世界は変わっていくはずだ。

最後にもう一度言う。今、この時も世界では罪のない子どもたちが命を失っている。

アナタはどう動く？

# 鎌倉市人権擁護委員会会長賞

堂々と

横浜国立大学教育学部

附属鎌倉中学校 一年

鷺谷 漱介

コロナ感染者の増加に伴い、感染者に対しての差別や偏見が、問題になってきている。この問題をなくするにはどうすべきか考えてみた。

初めに、どのような問題が起きているのかを調べてみた。感染者が退職させられていることを知った。感染したくてしたわけではないのに、何故退職にまでなるのか。よくみると、同じような事は中学校でも起こっている。自粛期間が終わり、登校するとクラスメイトからひどい事を言われ、不登校になってしまった生徒もいる現実。これを知り、自分は悲しさと大きな怖さを覚えた。最も怖いのは、言葉だ。言葉には不登校にまでさせる力がある。今は、SNS等で世界の人が誰でも見られる。このような時代だからこそ差別について考えてみる必要があると思う。

自身の体験談は全く違っていた。自分が感染し、自粛期間を終えた日の登校中に大きな恐怖心があった。最近のニュースを見てもコロナ感染者に対しての誹謗中傷が後を絶たないから

だ。自分にも降りかかるのではないかと、ドキドキしながら汗の滲んだ手で教室のドアを開けた。予想は大きく外れた。暖かく迎えてくれ、心配の声もかけてくれた。嬉しさがこみあげ、涙がでそうになった。その日の下校中、どうしたら皆が僕のような嬉しい気持ちになれるのかを、自然と考えていた。

ニュースやインターネットの告白で呼びかけること。これも一つの手段だと思いが現実的にそこまで効果はないと思う。コロナが当たり前の今、より効果のある方法を考えた。答えは今日の体験の中にあった。「自分がもし感染したら」ということを一人一人がじっくり考えることだと思う。今は誰が感染してもおかしくない時代になった。今こそ差別問題を話し合い、無意味な差別をなくす取り組みの必要性を感じる。

もう一つは相談することだと思う。「もし感染して差別を受けたらどうしよう」という悩みを親や先生、友達に話して得られたことが大きな支えになると思う。親や先生は必ず味方になってくれる。自身も感染した時、親に相談した。差別が怖いと

今の気持ちを正直に話した。すると、

「そんな人がいたとしても、堂々としていれば大丈夫。」

と言われた。その言葉を聞いて登校することを決心した。

「言葉」は恐怖も与える、一方で大きな勇気も与えてくれる力がある。今、不登校の人に僕の体験を通してこの言葉を届けた。少しでも支えになりたい。「一つの言葉によって学校に行ける勇気が湧くことを。」

今度は自分が感染した人を励ます番だ。休んだ人を感染者かと思つて怖くなるのは分かる。正直、以前、差別こそしてはいないが、他人を感染者かと疑つてしまつていた自分がいた。でも、僕は変わった。他の人もきつかけ一つで見方・考え方が変わるのではないだろうか。怖いと思う気持ちを捨て、皆平等に生きていけばいい。コロナに感染した人も、差別する方が非常識だと思えばいい。所詮、差別をする人は口だけだ。自分のことを考えずに他人のことだけを責めるだけだと思う。感染者は何も悪くない。堂々としていればいい。そう思える瞬間を一人に見つけてほしい。



## 鎌倉市人権擁護委員会会長賞

### 稲妻の少年の願い

鎌倉市立岩瀬中学校 三年

小林 龍平

道の真ん中で叫びながら歩いている人を見た。道ですれ違う人達は誰もがその人を嫌悪の目で見ていた。私も昔はその嫌悪感をさらけ出している一人だった。今は可哀想に思えてならない。本人だってそうなりたくてなったのではない。障害があるため、継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける者を障害者と呼ぶが、実は私もその内の1人になるはずだった。

私は生まれつき3つ身体的異常がある。その内の2つはここまで生活に支障はないが、残りの1つに三角頭蓋という頭蓋骨のおでこの方の骨が前につきだし、成長するにつれ脳を圧迫して障害となってしまう病気がある。私は運が良く0歳の時に発見され一歳の時に頭の骨を切って手術をした。そのため私は今生活に支障をきたす事はない。しかし私も障害者となっていたかもしれない。そう思うと障害者を見るたびに悲しくなってくるのだ。

私は先程手術をしたといったが、その時にできたもので私も嫌悪の目で見られる物がある。それは手術跡である。頭の耳の上から反対側の耳の上まで稲妻形のギザギザとした傷があり、

その部分だけ髪が生えてこないのである。そのため私は髪を切るとどうしても傷跡が見えてしまい、駅のホームで不審に見られたり、私の頭を指差して笑われた事もあるのだ。私はそれが悔しかった。「普通」の人を恨むことだってあった。だから私は髪を切る時に長めに髪をのこしてなるべく見えないように隠してきた。しかし障害者は隠すことができない。身体、知的、精神のどれもが隠すことができない。それが悲しく、虚しい気持ちにさせられる。しかし私も嫌悪の目で見られた事があるからだ。もしかすると同じ障害者となっていたかもしれない。だから私は障害への差別をなくしたい。障害を持っていても勇敢に生きていくのではないか。もちろん自分とは違う特徴を持つ者への恐れもあるだろう。しかし私は問いたい。なぜ、一方的に差別をするのか、はたしてその人達に何かされたのか、と。もしかするとされた人もいるかもしれない。しかしほとんどの人が誤った認識をし、先入観にとらわれているだろう。私はその人達に言いたい。されてからならそう思ってしまうのは仕方がないと思う。しかしほとんどの人が無害どころか今まで頑張っ

生きてきた人達だ、敬意を払ってもいいのではないかと。

先程間違った認識をしているといったが、私がある日聞いた会話で悲しい事があった。

「お前、それ障害じゃん。」

「障害者かよ。」

と軽々しく言っていた。私はその現状を悲しく思う。いろんな場所で聞く「障害」という言葉。この言葉を理解していない人が多いと思う。今でも障害者と聞くだけで顔をしかめてしまう人はおそらくマイナスのイメージを持ち、自分となるべく関わりのないように厚い壁を立てているに違いない。私はそう思っ  
てほしくない。せめて障害者とはどのような人達かを改めて知  
ってほしい。多くの人は有害ではなく毎日を頑張って生きてい  
る勇敢な人達だと知ってほしい。

これから障害者差別がどのようになっていくかは分からな  
い。しかしマイナスのイメージが多い事は確かである。これか  
らの社会は、健常者が共に寄り添い、理解できる、そういう社  
会にしていきたい。そのためには我々が、一人一人が、「障害」  
という概念を捨て去り、同じ一人の「人」として相互理解をし  
ていかねばならない。それが今求められる我らの人権の中にあ  
る権利であり、さらにいうと義務なのではないかと思う。同じ  
「人」は結局いくら分けても「人」なのである。かつて「人」  
は自らを分けてしまった。しかし今こそ我々は一つの「人」と  
して戻るべきである。



# 鎌倉市人権擁護委員会会長賞

## 小さな社会

鎌倉市立第一中学校 三年

相川 三穂子

私はイジメや問題がそれほど起こらない小さな中学校に通っている。私は学校が好きだ。特に友達と過ごす日々は苦手な勉強さえ楽しく超えられるくらい自分にとって幸せな時間だ。しかし、そんな学校で私はたまにある言葉を耳にする。それは「あいつ、マジで障害者」

という言葉だった。私はこの言葉を何度も聞いたことがある。この言葉はある1人の男子生徒が自分にとって都合が悪いことをする人に向けて発する言葉だった。最初はクラスのみならずも

「それは違う」  
など、否定する言葉を発していた。しかし、その言葉を何度も男子生徒が発していくうちに、その言葉を否定する声は自分含め、上がらなくなっていた。クラスのほとんどは、心の中で否定しているが、面倒になったのか、

「いつものことだから」  
と日常のように感じていたのかはわからない。私はなぜみんなが否定する声を上げないのか不思議だった。そのうち周りの雰

囲気や考えに流され、いつの間にか声を上げないようになっていた。

ある日、私達は『障害者』というテーマの道徳の授業を受けた。私はこの時、男子生徒が言っていた言葉を思い出した。そして辞書で障害者について調べてみた。障害者の意味を理解した上で男子生徒が発していた言葉がどれほど良くないことか、改めて感じた。それは二つの立場から考えたらよくわかると思う。まずは『障害者』と言われていたクラスメイトだ。ただ問題がとけなかっただけ、みんなと少し違う行動をとっただけ、男子生徒にとって都合が悪かったただけなのに、その子に対して『障害者』と発した。その子の行動は1つも障害者の意味と合っていない。その子にとって、とても嫌なことなのは私でもわかる。かといって、障害者が嫌な訳ではない。もう一つの立場。つまり、障害者を持っている方の視点から考えると、産まれつき、もしくは突然障害が発症した方、世の中には色々な種類の「障害」がある。しかしそのほとんどの人は誰も障害なんて望んでいない。とてもしようがないこと。なのにそれをバカにするよ



うに言われていた「障害者」これがどれほどよくないことかわかると思う。

そもそも、「障害者」という言葉に悪いイメージを持っている人が多いことがこの社会の悪い所だと私は思う。障害者はなにかを行うにあたって不具合を生じる方のことを示す。つまり生活や社会に対してできないことがある。これからの社会はそんな方たちに寄りそい、助け合いながら生きていく必要があると思う。障害に対して悪いイメージがあることを解消するためにはどうすればいいのだろうか。そもそも障害者を特別とするのではなく日常のように過せる環境を作り、みんな同じように生活を送れるような社会を作り上げていくことがイメージを変える方法なのではないかと私は思う。例えば公共の場でのバリアフリーを増やしていくことなどがある。一つ一つの事がより良い社会につながり、やがて障害に対しても悪いイメージを持つ人もいなくなるでしょう。

また、男子生徒が言っていた言葉はそれほど深い意味を持たず、軽い気持ちで言っているように感じた。しかし、その言葉はどんなに軽い気持ちでも言っただけではない言葉だったと私は思う。また、それを私達は否定する声を上げなければならなかったと思う。なぜなら、私達は実際に言われていないからなんとも思わないかもしれないが、その言葉を言われた本人はどんな気持ちだったのだろうか。とても不快な気持ちだったと思う。クラスの中でもダメなことはダメとみんな否定し、改善する

必要があると思う。なぜなら学校は小さな社会のようなものだから。

この世の中には誰もが好きなように、幸せになる権利がある。また、それを他の人が決めつけたり、否定する資格はない。誰もが幸せに生きるために、私たちは協力しより良い社会を作っていく必要があると私は思った。

鎌倉市人権擁護委員会奨励賞一覧

当たり前を認める

幸せになる権利

鎌倉市立玉縄中学校

三年 藤田 美純

鎌倉市立第二中学校

三年 野本 芹



## 第41回全国中学生人権作文コンテスト

### 鎌倉市審査会入賞者表彰式



- \*開催日 令和4年(2022年)11月28日(月)
- \*場所 鎌倉市役所 市議会本会議場
- \*出席者 入賞された中学生の皆さん、  
松尾崇市長、岩岡寛人教育長、人権擁護委員

当日は、入賞した中学生12名のうち11名が出席し、市長から鎌倉市長賞、教育長から鎌倉市教育委員会賞、人権擁護委員会会長から鎌倉市人権擁護委員会会長賞及び奨励賞をそれぞれ表彰しました。また、鎌倉市長賞受賞者(神奈川県大会優秀賞者)による作文朗読を行いました。

## 人権擁護委員とは

人権擁護委員制度は、様々な分野の人たちが、地域の中で人権尊重思想を広め、人権を擁護していくという考えから昭和24年に創設されました。

人権擁護委員は、市長が議会の意見を聞いて推薦し、法務大臣が委嘱した民間の人たちです。基本的人権を守り、人権が大切なものであることを知ってもらうため、地域に密着した人権啓発活動を実施し、人権への正しい理解と普及を図っています。

鎌倉市には、現在14名の人権擁護委員が配置されています。人権相談や中学生人権作文コンテスト、保育園などにおける人権教育紙芝居、人権啓発街頭キャンペーンなど、日々積極的な人権啓発活動をおこなっています。

### 【鎌倉市の人権擁護委員氏名】

山田 隆二	三留 利夫
平本 恭子	渡邊 義忠
入野 裕江	菱田 恵子
岡崎 美奈子	酒川 学
眞壁 成子	島田 正樹
曾根 民子	加藤 三恵子
新井 貴子	村上 史



# 平和都市宣言

われわれは、  
日本国憲法を貫く平和精神に基いて、  
核兵器の禁止と世界恒久平和の確立のために、  
全世界の人々と相協力してその実現を期する。  
多くの歴史的遺跡と文化的遺産を持つ鎌倉市は、  
ここに永久に平和都市であることを宣言する。

昭和33年8月10日 鎌倉市

## 鎌倉市民憲章

制定 昭和48年11月3日

### 前文

鎌倉は、海と山の美しい自然環境とゆたかな歴史的遺産をもつ古都であり、わたくしたち市民のふるさとです。

すでに平和都市であることを宣言したわたくしたちは、平和を信条とし、世界の国々との友好に努めるとともに、わたくしたちの鎌倉がその風格を保ち、さらに高度の文化都市として発展することを願い、ここに市民憲章を定めます。

### 本文

- わたくしたちは、お互いの友愛と連帯意識を深め、すすんで市政に参加し、住民自治を確立します。
- わたくしたちは、健康でゆたかな市民生活をより向上させるため、教育・文化・福祉の充実に努めます。
- わたくしたちは、鎌倉の歴史的遺産と自然及び生活環境を破壊から守り、責任をもってこれを後世に伝えます。
- わたくしたちは、各地域それぞれの特性を生かし、調和と活力のあるまちづくりに努めます。
- わたくしたちは、鎌倉が世界の鎌倉であることを誇りとし、訪れる人々に良識と善意をもって接します。



第41回全国中学生人権作文コンテスト神奈川県大会  
主催：横浜地方法務局・神奈川県人権擁護委員連合会

令和5年1月発行

事務局：共生共創部地域共生課